

和水町から脱炭素社会への一歩

遊休農地を活用し燃料用作物の試験栽培



化石燃料に代わる 資源作物

「エリアンサス」

近年、よく耳にする脱炭素社会やカーボンニュートラルといった言葉。簡単に言うと、地球温暖化の原因となる二酸化炭素の排出をゼロにする社会を意味する。地球規模の気候変動問題を解決するため、現在120以上の国と地域が「2050年カーボンニュートラル」を掲げ対策に乗り出している。中でも、再生可能なバイオマス資源を活用したバイオ燃料は、石油に代わる持続可能な次世代エネルギーとして期待されており、バイオ燃料には、資源作物（糖、樹木、草本）や廃棄物（下水汚泥、食料残渣）が挙げられる。資源作物の具体例として、ナタネ、ヒマワリ、サトウキビ等があるが、近年注目を集めているのが「エリアンサス」という植物だ。イネ科に属する多年草で、

熱帯・亜熱帯に自生する。日本では東北南部が北限、3〜4年で4〜5mに成長する。梅雨時に植えて翌年の春頃に収穫する。乾燥にも強く灌水もほとんど必要とせず、20年以上植え替えなしで栽培できる。生育旺盛だが雑草化しにくく、枯らしてすき込めば、再び農地として利用も可能。収穫したエリアンサスはペレットに加工し燃料として様々な場面で利用が可能となり、火力発電所では石炭と混ぜることで化石燃料の使用量を減らすことができる。栽培コストやペレット加工コストを低く抑えることができれば、有望な資源作物として期待される。



ペレット状に加工したエリアンサス

遊休農地を活用し エネルギーの地産 地消を目指す

東京に本社を置く大手電力会社の電源開発株式会社「Jパワー」は和水町でのエリアンサスの試験栽培に着手、今年で3年目となる。Jパワーは自社の石炭火力発電所の石炭使用量を減らすために、バイオマス燃料の利用促進を目指している。

JパワーOBで平野地区在住の福原明さんを通じて、エリアンサス試験栽培の候補地として和水町を選定した。最初の協力者である下津原地区の坂本晴一さんが約6反（6000㎡）の畑の利用を快諾してくれたことからスタートし、現在では27人の地権者が協力している。大屋地区の地権者は23人で、「大屋地区エネルギー試験栽培管理組合」を組織し、Jパワーとの一括契約を行っている。地権者のひとりである、長小



坂本さんの畑のエリアンサス（刈り取り後）

本格栽培誘致を

和水町へ

エネルギーの地産地消の先行事例として、栃木県さくら市の取り組みがある。市内の民間企業がエリアンサスの栽培とペレット燃料への加工を行い、さくら市の市営の温泉施設で利用する仕組みを実現。さくら市内の耕作放棄地の減少、雇用の創出及び地球温暖化抑制に貢献している。

和水町周辺地域は高齢化により、遊休農地や耕作放棄地が問題となりつつある一方で、エリアンサス栽培に適した気候であり、生産されたバイオマス燃料

の輸送に必要な高速道路や一般道の交通インフラにも恵まれている。正に次世代のエネルギー燃料の栽培に適していると言えるだろう。自然豊かな和水町で、環境に優しいエネルギー開発が進展することに期待が膨らむ。



大屋地区圃場 約30反（30000㎡）

福原 明 さん

電源開発株式会社の元九州支社長。
和水町平野地区在住。
Jパワーと地権者の仲介を通じてエリアンサスの試験栽培に協力。

問い合わせ先
【TEL】
080-5021-8801
【E-mail】
afukuhara714@gmail.com